第 54 回国語分科会国語課題小委員会（Web 開催）・議事録

令 和 ４年 １０月 ２１日（金）
１０時 ００分 ～ １２時 ００分
文部科学省１５階１５Ｆ特別会議室

〔出席者〕
（委員）沖森主査、森山副主査、川瀬、佐藤、滝浦、田中、成川、福田、前田、村上、善本各委員（計 11 名）
（ゲスト）早稲田大学教授　ペート・バックハウス氏
（文部科学省・文化庁）圓入国語課長、武田主任国語調査官、堀国語課長補佐、鈴木国語調査官、町田国語調査官ほか関係官
※ 沖森主査と事務局は、文部科学省１５Ｆ特別会議室にて参加。

〔配布資料〕
1　第 53 回国語分科会国語課題小委員会議事録（案）
2　国語分科会で今後検討すべき課題に関する意見（第 53 回まで）（案）
3　ローマ字のつづり方について：言語学の観点から（ペート・バックハウス氏提供）
4　「国語に関する世論調査」におけるローマ字表記についての調査結果

〔参考資料〕
1　国語に関するコミュニケーション上の課題（国語課題小委員会における審議経過の整理）（令和 4 年 3 月 8 日 文化審議会国語分科会）
2　今期（22 期）以降の国語課題小委員会における審議事項
3　令和 3 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要
4　文化審議会国語分科会及び国語課題小委員会の今後の日程

〔関係リンク〕
ローマ字のつづり方（昭和 29 年内閣告示第 1 号）

〔経過概要〕
1 事務局から配布資料の確認があった。
2 前回の議事録（案）が確認された。
3 事務局から、参考資料３「令和 3 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」について説明が行われた。
4 事務局から、配布資料４「「国語に関する世論調査」におけるローマ字表記についての調査結果」について説明があり、説明に対する質疑応答が行われた。
5 ペート・バックハウス氏から、配布資料３「ローマ字のつづり方について：言語学の観点から（ペート・バックハウス氏提供）」について説明があり、説明に対する質疑応答及び意見交換が行われた。
6 11 月 29 日に予定されている国語分科会において、国語課題小委員会の審議経過を報告するに当たり、その内容を沖森主査に一任することが了承された。報告資料案については、国語分科会前に委員に送付して意見をもらって反映させることもあわせて共有された。
7 次回の国語課題小委員会について、令和 4 年 12 月 23 日（金）午前 10 時から正午まで、国語分科会は 11 月 29 日（火）午前 10 時から正午まで、オンラインで開催

する予定であることが確認された。
８　質疑応答及び意見交換における各委員の発言等は次のとおりである。

○沖森主査
定刻になりましたので、ただ今から、第54回、今期５回目の国語課題小委員会を開会いたします。今回もオンライン上でのウェブ会議となりましたが、よろしくお願いいたします。
さて、本日は議事次第のとおり、（１）今後取り組むべき国語施策に関する課題について、（２）ローマ字のつづり方に関する整理について、（３）その他という内容で協議を行いたいと考えています。
事前に資料を御覧になっているとおり、本日は、早稲田大学教授のペート・バックハウスさんに御出席いただき、ローマ字に関するヒアリングを実施することとしています。本日は、ローマ字のつづり方に関する整理を中心に検討を進めたいと思います。
ヒアリングの前に、「国語に関する世論調査」で尋ねたローマ字に関する調査の結果について、詳しく見ていただきたいと思います。令和２年度及び３年度の調査をまとめた配布資料４「「国語に関する世論調査」におけるローマ字表記についての調査結果」を御覧ください。
文化庁国語課では、来年度、ローマ字に関する実態調査を実施する方向で動いているとのことです。その前に、「国語に関する世論調査」でもローマ字に関する問いを設け、これまでにはなかったような内容を尋ねています。世論調査は、主に国民の皆様方の意識について調べるものですが、ここからうかがえること、注意すべき点などを読み取ることができるならば、今後の検討に役立つのではないかと考えています。
それでは、配布資料４について事務局から説明していただいた上で、意見交換したいと思います。では、よろしくお願いします。

○武田主任国語調査官
それでは、ローマ字に関する調査結果について御説明いたします。
配布資料４の１ページを御覧ください。こちらは、令和２年度の調査で、２番目に新しいものです。6,000人の方を対象に、初めて郵送法を使った調査になりました。それまでこの「国語に関する世論調査」は、実際に調査員が足を運んで、対面で実施していましたので、大きな変更点です。ただ、結果として以前よりも多くの回答数を集めることができているといった良い面もあります。過去ずっと行ってきた方法と変わってしまったわけですが、コロナ禍が終息した後、どのようなやり方をしていくかということについては、改めて検討したいと思っています。
では、この令和２年度の調査について、２ページを御覧ください。この調査は、ローマ字における長音表記について尋ねているものです。これまで10年おきに３回調査しました。１、２回目は対面での調査である点に注意が必要ですが、３回目として、令和２年度に経年調査したものです。
ローマ字については、長音記号が付かないことがよくあります。例えば、パスポートの名前にはヘボン式を用いることになっていますが、長音記号が使われていません。「小野」と「大野」をローマ字で書く場合、長音記号を使わないと両方同じ表記「Ono」になります。これについてどう思うかということを尋ねています。結果は、「きちんと区別が付く方法を考えたほうが良い」という回答が、７割を超えています。これは過去の調査でも同じ傾向にあります。
では、その長音をどのように表記したらいいのかと尋ねたのが４ページからの調査です。「神戸」と「大阪」という都市の名前を具体例として聞いています。これを見る

と、長音記号を付けた「Kōbe」、「Ōsaka」が最も支持されています。一つ注意したいのは、この最も支持されている「Kōbe」、「Ōsaka」の長音記号は、内閣告示が示している山形（サーカムフレックス）とは違う棒（マクロン）だということです。実際に世の中では、駅などで時々目にするものなど、マクロンの方が多く使われているかと思われます。

また、「神戸」というのは、仮名書きで「こうべ」ですが、ローマ字入力と同じような「Koube」という書き方も、２割近い方が支持しているという結果が出ています。このように、長音記号の付け方については、これまでの「国語に関する世論調査」でも調査していました。

７ページを御覧ください。最新の令和３年度調査では、文化審議会国語分科会でローマ字について検討する可能性があるということで、これまでにないローマ字に関する問いを実施しました。

８ページを御覧ください。「ふだん、日本語がローマ字で書き表されているのを見ることがありますか」という問いです。８割以上の方が「ある」と回答しています。具体的には、「駅や道路の表示などにある日本の駅名・地名」、あるいは氏名、商品や店、団体などの日本語の名前が多くなっています。

12 ページを御覧ください。情報機器におけるローマ字入力について尋ねています。「パソコンやスマートフォンなどの情報機器で日本語を入力するとき、ローマ字入力を使いますか」という問いです。この結果は、「よく使う」という方は４割強、「時々使う」という方が１割ほどで、合わせて、「使う（計）」という方が 55％ほどになっています。「余り使わない」、「全く使わない」という方も４割ほどいます。これは、そもそも情報機器を使わないという方々も含めた数字です。

14 ページを御覧ください。「ふだん、日本語をローマ字で書き表すことがありますか」ということを尋ねています。結果は、「ある」と回答した方は２割ほどで、75.8％の方は「ない」と回答しています。

次に、「ある」と回答した方に、「ふだん、どのようなときに日本語をローマ字で書き表しますか」と尋ねました。一番多かったのは、「氏名をローマ字で書くよう求められたとき」で、８割近い方がそう回答しています。この問いは複数回答できますので、経験したことは全て回答しているという前提ですが、そのほかの選択肢を選んだ方はそれほど多くありませんでした。「ローマ字を使って、漢字や仮名と異なる印象を出したいとき」、「メールや手紙、メモ、お知らせなどを主にローマ字による日本語で書くとき」、「日本語を母語としない人に、ローマ字で日本語を示したいとき」、この辺りは大体２割前後となっています。上から三つ目、「メールや手紙、メモ、お知らせなどを主にローマ字による日本語で書く」という方が 19.4％となっていますが、これは、全体でいうと大体４％ぐらいに当たります。まず問８で、日本語をローマ字で書き表すことがありますかと聞いて、「ある」と答えている方が２割です。その２割の中で、19.4％の人が、「メールや手紙、メモ、お知らせなどを」日本語で書くときにローマ字を使うと回答したということで、これは、調査の対象全体からすると４％ぐらいの方です。これを多いと見るか、少ないと見るか、いろいろな見方があると思いますが、お使いになっている方がいる可能性があるということがここからうかがえるかと思います。

16 ページの表９を御覧ください。日本語をローマ字で書き表す場面についての性別・年齢別の結果です。メールや手紙、メモ、お知らせなどをローマ字による日本語で書くと回答している方は、60 代以上の方で多い傾向があります。60 歳～69 歳では 25.8％、70 歳以上では 28.2％となっています。

17 ページを御覧ください。いわゆるヘボン式、訓令式、それから日本式といったものうち、どのローマ字表記を使うかについて尋ねています。全体的な傾向としては、へ

ボン式を使うであろうという方が多くなっています。ただ、例えば（６）「五所川原」という地名の表記に関しては、訓令式の方が少し優勢になっています。

18 ページを御覧ください。今回の調査では、いわゆるヘボン式あるいは訓令式以外の表記も選択肢にあります。例えば「御宿」で、39.3％の「Onjyuku」というのは、訓令式でもヘボン式でもない書き方になりますが、４割ぐらいの方が、これをお使いになると回答しています。同様に、「抹茶」でも、ヘボン式でも訓令式でもない「maccya」という書き方を使うだろうと回答している方がいることが分かりました。

23 ページを御覧ください。日本式も一部ありますが、主に訓令式とヘボン式のどちらのつづり方を使うかをお尋ねしたところ、主にヘボン式の方が優勢であったという傾向が見られます。一方で、ヘボン式ではなくて訓令式を使うという方もいます。例えば、「明石」は、全体では 75％の方がいわゆるヘボン式をお使いになると言っていますが、60 歳以上では３割から４割の方が訓令式の方を選んでいます。また、４番目の「厚木」などでも、訓令式を選んだ方が 60 代以上の方に多く見られるような傾向があることが分かりました。

今後、ローマ字について検討していただくに当たって、この調査の中から何かお気付きになることや、注意しなくてはいけないといったところを、御指摘いただければ、大変有り難いと思います。

○沖森主査

ありがとうございました。ただ今の御説明について、何か直接関係する質問があれば、お願いしたいと思います。

（ → 挙手なし。）

それでは、意見交換に移りたいと思います。令和２年度は、経年の調査で長音の表記に関して尋ねています。この令和２年度のものを含めて、10 年おきに計３回の調査が行われています。また、最新の令和３年度調査では、新たに、ふだんローマ字を見たり使ったりすることがあるか、ローマ字入力をすることがあるか、また、いわゆる訓令式とヘボン式を中心に、どのような表記を使っているかなど、具体的なところまで尋ねています。今後の審議において、特に注意するところや参考とすべきところなどがあれば、御指摘いただきたいと思います。また、今後事務局でローマ字のつづり方に関して調査してもらいたい内容などを御提案いただくこともお願いしたいところです。そのほか、気になる点や御感想などでも結構ですので、御自由に御発言いただきたいと思います。

○福田委員

御説明ありがとうございました。

12 ページ、７番の情報機器における日本語入力でのローマ字入力の使用というところです。この点に関しては、追加の説明があったように、情報機器を使わない人も含まれているということなので、かなり慎重に考察しなくてはいけないと思われます。次に聞くときには、情報機器を使う人だけに限定して、日本語入力するのか、どのようにローマ字で入力するのかを聞いたらいいのではないかと思いました。

それから、16 ページの表９のところで、高齢者の方が、メールや手紙、メモ、お知らせなどを主にローマ字による日本語で書くというのが増えているという結果についてです。この質問の意味がよく分からないのですが、このまま読むと、日本語で「おはようございます」とかメールで挨拶をするときにもローマ字で書くように思えます。それを高齢者、60 歳以上の方がやっているとは思いづらいと思います。そうすると、質問の仕方がどうだったのかという気がします。この質問を使った意味や意図というのを教えていただければと思います。

○武田主任国語調査官

今、福田委員が御指摘くださったとおりで、「おはようございます」といったものをローマ字で書くようなことはほとんどないだろうと我々も思っているところがありました。しかし、実際に調査したところ、予想に反して、使っていると回答している方がいるということです。全体のうち約４％に当たる 142 人、高齢者でいうと４％から５％の方が、そういったローマ字で、手紙を書いたりメールを書いたりすることがあると回答しています。それについて、本当にそうなのかということは、今後又追加の調査等を考える必要があるかもしれませんが、戦後すぐにはローマ字教育が今よりもかなり盛んに行われていたということもありますので、もしかしたらそういったこととの関連性などもあるのかというようなことも話題にしております。

○福田委員

分かりました。総数から比べれば５％以下ということで、少ないということですね。そうすると、ほかの同じ年代はほとんど書かないという意味で納得しました。

それから、次回の調査ということですが、どのローマ字表記を使うかということに関して、今回の調査でとても面白い結果が出ていると思います。幾つかの例の中で、武田主任国語調査官が追加の説明をしてくれていた、特徴的な例というのがあると思います。その特徴的な例を実際に書いてもらうという調査をすると、どのように私たち日本人がローマ字を使っているのかがはっきり分かるのではないかと思いました。

○沖森主査

ありがとうございました。ほかにございませんでしょうか。

○森山副主査

ただ今の福田委員の御意見に賛成です。

少し付け加えると、キーボード入力をする場合と、それ以外の場合とで、少し違いますので、そういった入力の仕方も含めて、ローマ字入力か、非ローマ字入力かということ、あるいは非ローマ字入力でも、平仮名入力とほかの入力があるのかもしれませんが、そういうことを聞くのがいいかと、伺っていて思った次第です。

もう一つです。こういう意見分布を一つの根拠としていろいろと考え方を出していくときに、今回の調査では、Ｎ数の偏りというのでしょうか、10 代、20 代が少ないですね。ローマ字入力などで敏感に反応される世代と言うと、10 代、20 代の辺りかと思います。仕方ないのかもしれませんが、調査人数の偏りというのは気を付けないといけないと思った次第です。

○沖森主査

ありがとうございました。ほかにございませんでしょうか。

○善本委員

御説明ありがとうございました。大変興味深く調査を拝見しました。

これから先、調べていくに当たって、一つ気を付けた方がいいと思うことがあります。回答されている方が、「書き表すこと」と「入力すること」をきちんと峻(しゅん)別しているかどうかというと怪しいと思います。一つの言葉に対して書き表すときと入力するときで同一人物が違うようにしているということがあり得ると思います。入力することと、結果として出てきた文字に書き表すことを、きちんと区別して回答できるよ

うに注意をした方がいいかと思いました。

それから、問7の質問に関してです。自分がもしこの質問をされたら何と答えるか、困ると思いました。「パソコンやスマートフォン」と書いてありますが、ほかの方は分かりませんが―私の家族もそうなので、そういう人もいるのではないかと思いますが―私はパソコンの場合には100%ローマ字入力して、スマートフォンの場合はフリック入力することが多く、ローマ字はほぼ使いません。タブレットになると、ローマ字画面が出てくることがあるのでそれも使うといったように、機材によって変えています。この質問に対して、私は「よく使う」と答えるべきなのか、「全く使わない」と答えるべきなのか、迷う場面が出てくると思ったので、その辺りも峻別できるように質問していただくといいと思います。「書き表すこと」と「入力すること」の間に様々な違いが出てきていると思います。先ほどもお二人の委員からそういうお話もあったかと思いますが、是非そのようにしていただければと思います。

○沖森主査

ありがとうございました。ほかにございませんでしょうか。

○バックハウス氏

私も今、全く同じことを言おうと思っていました。スマホの場合はローマ字入力する人はほとんどいなくなっていると思います。長いスパンで見てみると、逆に、実際に入力する人たちが、あと10年、20年で、少なくなる可能性もあると思います。その辺を後で比較できるように、今の時点で把握するようなデータがあると非常にいいと思います。

あともう一つ、聞けるのであれば聞いてもいいかと思ったことがあります。これは自由記述の回答になるので、テクニカルな問題でできないかもしれませんが、ローマ字入力の場合、キーボードを使って困ること―例えば入力したいけど「ぃ」がなかなか出てこないといったような困ることは誰でもあると思うので、その辺りも聞ける方法があれば、興味深いのではないかと思いました。

○沖森主査

ありがとうございました。ほかにございませんでしょうか。

○滝浦委員

なかなか面白い結果だと思って拝見しました。全般的に何点か気付いたことを申し上げたいと思います。

一つ、母音の長短の区別、「大阪」、「神戸」の表記のところで、年代別を見ていくと、年代が若くなるにつれて、上に記号が付かない、「Kobe」と回答する率が上がっています。このことを考えると、若い人ほど、どっちでもいいというか―英語で書く場合、記号がないので、何か英語風といったことを意識するのかもしれませんが―結果的に長短の区別をしなくてもいいのではないかと思っている可能性があるのかもしれないと思いました。先ほど御指摘があったように、若い方の回答数が少ないので、それは考えなければいけませんが、逆に言うと、若い人で回答をしてくれた人は、ある意味で意識が高い人であるかもしれないので、そういう人ほど長短の区別は要らないと思っているということであったら、それはそれで面白いと思いました。

また、全般的に人々の表記の好みという観点で見ると、全体的にはヘボン式が人気

だということはそのとおりですが、例えば、「丹波」の撥(はつ)音「ん」の表記をどうするかについては、ヘボン式だと「mb」になるはずのところ、それは余りなくて、「nb」の方が支持を集めているといったことになっています。当然かもしれませんが、人々の好みはそれほど体系的なわけではないという感じを受けました。

それから、先ほど話題になっていた、メールなどでローマ字を書くことがあるという話ですが、一般の人がローマ字でと言われたときに、それは、日本語を日本語としてアルファベットを使って書くことだと、本当に理解して答えてくれているかどうかは分からないという気がします。例えば挨拶の「ハーイ」というのを「Hi」と書いて、それをローマ字で書いているという意識があるかもしれないと思います。その辺りは、改めて聞くなら、どういうことで聞いているのかという考え方をきちんと伝える努力が必要かと思いました。

○沖森主査

ありがとうございました。ほかにございませんでしょうか。

○川瀬委員

今回の調査、とても面白かったです。ローマ字もそうですし、全体を見ても本当に面白いと思います。じっくり読ませていただきます。

ローマ字を、手なり入力なりで書くときの調査ですが、どう書くかだけではなくて、どれが見やすいかも聞けるといいかという気がします。自発的に自分で書くときは、頭の中でキーボードをたたいてみたりして、自分の意思で並べていきますが、ぱっと視認したときにどれが一番見やすく感じるのかというのも、今後その表記を考えていく上では、参考になるかと思います。

○沖森主査

ありがとうございました。では、ほかにございますでしょうか。

（ → 挙手なし。）

御意見、どうもありがとうございました。お気付きのことがありましたら、引き続き事務局に御提案いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、ヒアリングに入りたいと思います。本日は、言語学専攻の早稲田大学教授であるペート・バックハウスさんをお招きしました。バックハウスさんは、ドイツの御出身で、2005 年から日本に定住なさっています。社会言語学、会話分析、文字と表記などを専門分野とされています。また、言語景観についての研究もされていて、「日本の言語景観」という御著書もあります。

ローマ字を扱うに当たっては、ふだん街中で目にする標識や案内、看板などにおける表記の実態を踏まえておく必要があるかと思いますが、そういった辺りについての知見をお伺いできるかと思っています。さらに、日本語が堪能でいらっしゃいますが、元々は日本語を母語としない日本語学習者、生活者としての御経験をお持ちでもあります。そういった観点からもお考えをお伺いしたいと考えています。

バックハウスさんからは、配布資料３「ローマ字のつづり方について：言語学の観点から（ペート・バックハウス氏提供）」を、お預かりしています。こちらを御覧になりながらお話を聞いていただきたいと思います。

それでは、バックハウスさん、よろしくお願いいたします。

○バックハウス氏

御紹介ありがとうございます。「日本語が堪能」と言っていただきましたが、引き続いての日本語学習者です。どうぞよろしくお願いいたします。

Zoom で資料を共有いたします。

それではまず、現状について簡単にお話ししたいと思います。

一つは、当たり前のことですが忘れてはいけないことで、ローマ字は漢字・仮名と違って、飽くまでも補助的な役割です。少し言い方が変かもしれませんが、本当の日本語の書き方ではないというのが一般的な考えだと思います。日本語を書くと言えば、基本的に、漢字仮名交じり文です。実際にはローマ字交じり文でもありますが、メインは漢字・仮名だということです。補助的な役割とは、地名、人名などの場合で、特に言語景観にはそれなりに多くなっています。

先ほども話があったように、ローマ字には主に二つのつづり方があって、いわゆる訓令式とヘボン式です。訓令式は、ごく簡単に言ってしまえば、どちらかというと日本人向けで、小学校でも、まず訓令式を中心にローマ字を学びます。逆にヘボン式は、日本語の音声体系が分からなくても、それなりに読めるようにするための外国人向けと考えていいと思います。

その二つのシステムの主な違いが今日の中心になります。まとめますと、サ行の「し」、それに関連する「じ、しゃ、じゃ、しゅ、じゅ、しょ、じょ」、タ行の「ち」と「つ」、ハ行の「ふ」が主な違いです。それぞれの違いは、一番下の２行にまとめてあります。

実際にどれだけ違いが出てくるか、簡単に把握するために、山手線の 30 駅―最近一つ駅が増えました―その駅名でどれだけ違いが出てくるのか、まとめてみました。赤になっているところが、普通はヘボン式で書きますが、もし訓令式で書くとこうなるということです。数字で言うと、違いなしが半分以上です。例えば「五反田」は訓令式、ヘボン式どちらでも同じです。違いが１か所あるのが 33%、「目白」は「ｊ」で書くか「ｚ」で書くかなどです。２か所変わるものもあります。「浜松町」は、「tsu」が「tu」に、「cho」が「tyo」になります。仮名表で見ると数か所だけの違いに見えますが、意外と違いが出てしまうということが、ある程度確認できるかと思います。

先ほど武田主任国語調査官のお話にも出ましたが、訓令・ヘボンの二式だけでなく、その他のつづりも数多くあります。非常に簡単な調査ではありますが、グーグルで検索してみました。どこまで信頼性があるか分かりませんが、「新宿」を幾つかのつづりで探してみた結果、ヘボン式の「Shinjuku」というつづりが一般的でした。２行目は訓令式で、驚くくらい少ないです。３行目は日本式で、更に少なくなります。ここまでがいわゆる３式です。その下は、そのどれでもないようなもので、例えば４行目は、頭が訓令で後ろの「juku」がヘボン式です。５行目は逆に頭がヘボン式、後半が訓令式です。最後は、先ほど武田主任国語調査官のお話にも出たように、「jy」という、訓令式でも日本式でもヘボン式でもないものです。

言語景観の中にも、そのいわゆる混合式の例は多くあります。言語学の教科書にも、日本語の音声の論文にも出てきます。また、配布資料の「国語分科会で今後検討すべき課題に関する意見（第 52 回まで）（案）」でも「パーティー会場」の「KAIJYO」が「JY」のつづりになっています。これはかなり多く存在しているものです。

続いて、理論の観点からお話ししたいと思います。文字表記研究の中では、一般に、「浅い正書法」と「深い正書法」という分け方があります。何か、浅い＝悪い、しっかりしない、深い方がいいといった印象があるかもしれませんが、そういうことは一切ありません。評価は含まれていない扱い方です。「浅い正書法」とは何かと言うと、文字と発音を規則的に表すものです。文字と音素との関係がなるべく一対一になる、その理想を 100%満たす表記はないのですが、それに近いようなものを「浅い正書法」と言います。スペイン語はその一つの例です。

「深い正書法」は、逆に、後の世代でも語源が分かるように、あるいは形態論的な関係が明確に残るように、少しずつ音がずれていっても、なるべく表記、正書法を変えないものです。結果としては、音声と文字の関係でだけでいうと不規則的になってしまいます。その代表的な例は英語です。英語は世界で学習者が一番多い割に、不規則的であることが残念です。

一番よく言われる例で、御存じの方もいらっしゃると思いますが、アイルランドの作家ジョージ・バーナード・ショー(George Bernard Shaw)が、極端な例として、「fish」という英語は、「ghoti」というつづりでも可能だと主張しました。なぜかというと、「laugh」の「gh」が/f/の発音になり、「women」は「o」なのに/i/の発音に、「nation」の「ti」は/ʃ/という発音になります。これは極端な話ですが、「ghoti」は/fiʃ/という読みもできるという例です。御本人が英語の正書法について非常に不満を持っていたので、そのように極端な例を出しているのですが、英語はそれだけ不規則的で、「深い正書法」になっています。

日本語でメインになっている、ヘボン式、訓令式のローマ字のシステムをそれに応用すると、ヘボン式の方は、どちらかといえば浅い方です。なぜかというと、文字と音素がなるべく一致するようにしてありますから。必要に応じてこれからスライドで使う記号ですので、簡単に説明しておきますが、文字表記研究では、／／は言語学全般で、音素です。＜＞の方はいわゆる書記素（grapheme）です。

/s/という音はなるべく<s>という文字で書く。これが/ʃ/という音になった場合には、同じ音ではないので<sh>と書く。/t/という音は<t>という文字で書いて、/ts/という違う音の組合せになった場合は、その組合せのままで<ts>と書きます。

ハ行では、完全には一致しないのですが、/h/という音と「ひ」の/ç/という音は一緒に、一番近い英語の<h>という音で書いて、「ふ」の/Φ/という音は、「は」とは違いますので、英語で一番近い<f>という書き方にします。

訓令式の方は、正に深いというコンセプトが当てはまると思います。なぜかというと、サ行は全部同じ行なので、<s>で書きます。昔、日本語はたしか/si/という音もあったのですが、これは少しずつずれてきているんです。しかし、そのずれを表記では認めないので、なるべく同じ行、その関係がずれないようにして、タ行も同じで、ハ行も同じ、全部<t>、<h>で書くことになっています。いつも思うのですが、とてもきれいなことに、濁音になった場合も、英語の無声の<s>が有声の<z>に変わります。<t>も同じで、全箇所同じように、無声音の<t>が有声音の<d>に文字どおり変わるので、正に深いなと思います。そうすると、例えば一つの五段動詞の場合、同じ動詞で何が起きているのか、目で見てもとてもきれいに把握できます。それがヘボン式で書いた場合、見えなくなってしまいます。これは訓令式のすごいところの一つだと思います。

先ほどもローマ字学習について少し話しましたが、教科書の二つの例があります。例えば資料のこちらの教科書の場合では、ローマ字のところで、「次に、横に見てみましょう。カ行の音には、全部「ｋ」がついています。」「ka、ki、ku、ke、ko」とあります。その次が面白くて、「ほかの段や行は、どのように表しているでしょう。」ということで、見てみますと、幾つかの行では、いわゆる訓令式ではなくて、いわゆるヘボン式が括弧の中に付け加えられています。ただし、例としては、これはわざと選んだのかもしれませんが、完全に訓令式が使われています。「ちゃわん」が「ch」じゃなくて「ty」、「でんしゃ」が「sh」ではなくて「sy」になっています。基本は、訓令式のルールでまずローマ字を学ぶということだと思います。

ただ、同じ教科書で、実例の写真を見ますと、これは全部ヘボン式です。訓令式だったら「Ｚ」や「Ｓ」になっていたところです。「Shin-Ōsaka」が「Sin」、「Higashi-Yodogawa」も同じです。やはりヘボン式の方が普及していることが分かります。そうでない例はなかなか見付からないぐらいです。

私が持っているデータを資料に三つ載せました。これは多分読むつもりもないものですが、「tanosiku」と「si」になっています。ピザ屋の「BOKUSYA」は「SYA」になっていて、「MATUBAYA」、これはかなり珍しいと思いますが、「TSU」ではなく「TU」になっています。これは見付けて写真で記録するくらい珍しく、なかなか言語景観では出会わないものです。これは極めて例外的なものだと言っていいと思います。

外来語の場合は、ほとんどはヘボン式でもなく、英語のつづりに戻しています。例は数え切れないほどありますが、例えばこちらの「よみうりランド」は「rando」とは書きません。「rando」では誰も行きたくなくなるかもしれません。ここは英語のつづりで「LAND」になっています。先ほどの「パーティー会場」も、当たり前かもしれませんが、「パーティー」が「Pati」ではなく、「Party」になっています。

ほとんどの場合がそうで、逆にそうしない場合は目に飛び込んでくるぐらいです。資料に載せましたが、これもかなり例外的なもので、片仮名の「サンライフ」は、明らかに語源は英語の「Sun_Life」ですが、そのまま仮名のとおりにローマ字にしています。なかなかそういうのはなくて、かなり珍しいものです。見て何か珍しいなと感じる方もいらっしゃると思います。大抵、英語のつづりに戻しています。

このように、外来語の話はローマ字のつづりと切り離せないことだと思います。「外来語の表記」のとき―これは半世紀前、昭和29年の話ですが―そのとき既に、一般の仮名以外を使うものが幾つかあります。特に見ていただきたいのは二つです。「ティ」又は「ディ」という組合せで、その音も実際にあるので、それを表すために、小さい仮名を組み合わせたものが示されています。ヘボン式の利点についての話になりますが、とても重要な点は、今それをローマ字で考えるときに、ヘボン式の場合は、実際に日本語の音として存在する「チ」、「ティ」、「ディ」のどれも表せます。正に浅さの特徴です。「チ」は「chi」、「ティ」を「ti」と書きます。ただし、訓令式になるとどっちも「ti」になるので、どちらなのか区別が表せません。訓令式のつもりで「ti」と書くと、これは「チ」なのか「ティ」なのか分からないということです。さらに、「ディ」は、訓令式では表す文字がなく、ヘボン式でしか表わせません。「di」と書くと、「チ」に濁点の「ヂ」になってしまいます。そういう意味では、ヘボン式はよりいろいろな音を表すことができるというのが一つの利点です。

この利点についてもう少し考えてみます。これもかなり前の資料ですが、昭和26年の小学校学習指導要領に「ローマ字は、表音文字であり、単音文字であるから、話しことばや書きことばに対する反省を強め、ことばの決まりについての児童の自覚を高めることができる。」とあります。似たような文章はその後も何度も出ています。言葉に対する意識、文字と音声についての意識をなるべく若いときに育てるというようなことで、私も非常に重要なことだと思います。そう考えると、ヘボン式のローマ字は、そのことができると思います。なぜかというと、小学校で初めてローマ字が導入されるときに、例えば先ほどの教科書で、資料に示すように、このようにヘボン式で子供たちに示せば、自分で行を見て気が付きます。サ行で何で1か所だけが「sh」で、ほかは全部「ｓ」になっているのか。何でタ行の途中で「ch」、「ts」になっているかと。先生側は、本当は「サ」と「シ」は同じ音ではないと説明できます。全部サ行ということで、意識していませんが、事実としては音が違うので、それを若いうちに子供に伝える、意識させる、その良いきっかけになると思います。タ行の場合でも同様に、「ch」で書いていることについて、「ti」は「ティッシュ」の「ティ」で、これは普通の日本語の音として存在しているので、「チ」と「ティ」は違うということを若いうちに子供に教えるのにとてもいいチャンスだと思います。

もちろん英語のためにローマ字を学ぶわけではありませんが、英語教育の現場からお話しすると、私が気になっているのは、例えば「sea（海）」と「she（彼女）」という二つの言葉です。「スィ」は高齢者の方などは発音できない方もいるかもしれません

が、今の大学生は、「シ」と「スィ」は全く問題なく発音できます。逆に、「シ」と言ってはいけないと思って、英語で実際に「シ」の発音になっている場合も「スィ」と言ってしまうことが非常に多いです。両方の音ができるのに間違えて発音するのはとてももったいないと思います。もし小学校のときにこのように区別を説明したら、その後は苦労しなくなるかもしれないと思います。

あと少しだけ簡単に説明したいと思います。先ほど武田主任国語調査官のお話にも出たこととして、もう一つ考える必要があるものはキーボード入力です。

ここで大きな要素は、論理的であるかどうかではなく、キー・ストロークの数です。それを考えると、訓令式は、ヘボン式より少し有利だと思います。特に多く出てくる、「シ」は、「si」で入力する人が実際に多いと思います。1個少なく済むのに、たくさん打つのでは大きな負担になってきます。「チ」も同様です。「ti」は二つで、「chi」は三つですので、この辺はかなり訓令式の方が便利だと思います。ヘボン式も少しは有利なところもあるのですが、訓令式の方が全体としては有利になっています。

もう一つの問題点は、先ほども少し発言しましたが、こういうことです。例えば「三軒茶屋」という地名の場合は、訓令式のままで入力しないと出てきません。電車の案内では「j」とヘボン式で書いてありますが、そのまま入力しても変換されません。ここは正にその深さが出ています。「茶」から来ているという語源が分からないと、なかなか変換されないということもあります。これは入力方法に問題があるという観点もあるかもしれませんが、現在の入力方法では、訓令式の方が便利になっています。

最後に長音の話です。例えば西洋の言語学専門書、「A History of Writing in Japan」に、日本語の表記について、一度だけ出てきます。長い「オ」のときにこれだけバリエーションがあるという指摘が日本国外でも認識されています。

次に、去年の「国語に関する世論調査」の結果をもう一度表示します。これだけ多くの人がいわゆるマクロン(¯)で表すというのは、最初見たときに少し驚きました。半分以上の人がマクロンを使う書き方にしています。

ここでは、長音についてその他のものも簡単にまとめてみました。まずマクロンは先ほども話したものです。なるべくプラス・マイナス式でまとめてみました。非常に大きなプラス面は、実際の普及です。マクロンが一番多くて、先ほどの教科書もそうでした。「Ōsaka」は、ただの棒、いわゆるマクロンになっています。問題点は、キーボード入力が面倒だということ、もう一つは、「ee」と「ei」、「oo」と「ou」の違いが見えなくなってしまうことです。全部一つの長い母音プラス棒になるので、その細かい区別が付かなくなります。

続いては山形（ˆ）ですが、言語景観に限って言えば、普及していないのが一つの問題です。例を探してもほとんどありません。これは唯一私のデータにあるものですが、本当に山形のつもりなのか、それとも「0」の形に合わせて少し曲がっているマクロンなのか、微妙なところです。同じ店のほかの看板で見ていたら、マクロンになっているんですが、山形にも見えるというものです。このように山形はほとんど目にすることがありません。入力については同じ問題で、特殊文字として入力しないとできません。重なる母音が不分明になるのもマクロンと同じです。

もう一つは、棒を使わないで、まるで仮名をそのままローマ字にしたような方法です。これは仮名のとおりに入力しますので、「ee」か「ei」か、そのまま表記可能になります。もう一つのいいところは、形態素と別の形態素が合体しないことです。長音記号を使うと、例えば「muzukashii」が、一つの「ｉ」と長音記号になるのは、誰が考えても望ましくないと思います。そういう問題点もこの方法では解決します。また、入力しやすく、特殊文字は一切使う必要がありません。問題点は、母音文字のクラスターが発生します。この方法だと「女王」は「joou」と三つの母音が続きます。さらに、英語では「oo」、「ou」は違う読みになるので、外国人は「o」が二つあったら「ウー」と

読む可能性が高いです。例えば、「Souryu」というもので、「Sou」の長いオは「ou」と表記しています。この最後の「ｕ」はもしかしたら「リュウ」、長いウだったのかと思って、ホームページを見たら、ウェブアドレスは「ｕ」が二つあって不規則です。

もう一つは、「国語に関する世論調査」にも出てきたもので、無表記、つまり、長音を表さないものです。入力しやすいのは間違いありません。しかし、「o」の場合は特にそうですが、英語では、「o」は伸ばすことが多いんです。「トウキョウ」と「トーキョー」はそんなに変わらないので、場合によっては、ほとんど近い発音になるものもあります。この「Chofu」は英語風の表記です。全く日本語が分からないままで読んでも多分誰でも「チョウフ」と読めます。「チョフ」とは読まないと思うので、その意味では問題ないかもしれませんが、逆に混乱を招く場合も多いと思いますので、プラス・マイナスどっちもあるということでマークしました。

先ほどの「国語に関する世論調査」でも、望ましくないという答えも多かったと思いますが、「大野」と「小野」の区別です。そんなにあるわけではありませんが、場合によってはかなり大変なことになる可能性もあります。そういう意味では、全く表記しない場合は、違うものであると区別できないのが良くないという考えもあります。

長音その他の例です。「YU-NO」と、片仮名のように棒「-」を母音の後に付けることがあります。私の学生もたまにしています。これは片仮名のようなもので、日本語教室などを見ると、全く存在しないわけでもありません。

この「YOU」の例は、英語の読みを使っています。恐らくパン屋さんの名前は、「ヨウ」ではなく「ユー」だと思います。先ほどの話につながりますが、これは英語の語彙の読みを基準に、「あなた」という良い意味も同時に取るようにしているようです。

これも探せばかなりあるものですが、「ｈ」を使って伸ばす「TOHTO」という例です。これは「oh」のときだけで、「uh」や「ah」は余り見かけません。

簡単にまとめますと、ある程度統一したローマ字つづりが望ましいですが、幅があってもいいと思います。特に細かいところ、例えば、長い母音の表し方、はねる音―「ン」を「ｍ」にするか―、促音、分かち書きでどこにスペースを入れるか、その辺りについては、完全に決めるのが難しいと思いますので、現状のままでも特に問題ないと思います。ただ、最初の話のように、訓令式とヘボン式の併存は、余り望ましい状態ではないと思います。

それぞれのシステムの利点をまとめてみますと、訓令式の場合は、その深さがとてもきれいです、論理的で、日本語のできる人としてはすごくいいと思います。また、今後もキーボードのローマ字入力がそのまま続いていく、あるいは増えるなら、忘れてはいけないことですが、２回打つか、３回打つか、かなり労力に違いがありますので、この辺でも訓令式の方が優れていると思います。

ヘボン式の利点は、逆にその浅さにあります。音と文字の近い関係がいいところだと思います。文字だけではなく、増えている新しい日本語の音素体系について、例えば「チ」は「chi」、「ティ」は「ti」のように、より細かく区別を付けることができます。これは訓令式では表すことはできません。それと同時に、先ほど少し熱心に話しましたが、小学校のときにその区別を子供に教える、とてもいいチャンスだと思います。

最後に、これも忘れてはいけないことですが、実際の普及です。これは今回の「国語に関する世論調査」の結果を見て、非常に驚きましたが、日本人の中でも、ヘボン式を使う人が多いということです。「宇治」の場合は、キーストロークがどちらも三つで同じです。「明石」は、私は左の「si」のように入力します。「shi」では入力しません。データによると、大体４分の３の回答者がヘボン式の方です。「愛知」も同じ傾向です。普及から考えると、ヘボン式がかなり優位に立っていると言えると思います。

長くなって申し訳ありません。私からは以上です。御清聴ありがとうございます。

○沖森主査

バックハウスさん、どうもありがとうございました。言語学的な観点からの興味深いお話を伺いまして、新鮮な感じがいたしました。

では、ただ今のお話の内容について、直接の疑問点あるいは確認しておきたい点など、直接の質問があればお伺いしたいと思います。

○成川委員

御発表、どうもありがとうございました。

山手線の駅の表記が出ていたと思います。会社の最寄りなので、今日も地下鉄の新橋駅から会社まで歩きました。地下鉄の新橋は「shim」なんです。この辺りはどっちの方がいいとお考えでしょうか。

○バックハウス氏

先ほども申し上げましたが、これは別に統一する必要はないと思います。なぜかというと、発音には余り関係ないからです。英語の場合、「新橋」を「ｎ」で書いても「ｎ」で発音しません。自動的に「ｍ」の発音になります。英語の単語でも、「ｎ」で書いて、「ｍ」の発音になることは普通の発音の仕組みです。そうしますと、個人的には、「ｍ」にする必要はないと思います。一方で、既に定着しているものがそれだけあって、例えば「朝日新聞」は、ローマ字では「ｍ」で書くようになっています。これはどちらでもいいかと思います。全部統一した方がいいですが、これについては少しバリエーションがあっても問題はないと思います。

○成川委員

余り気にならないということですね。

○バックハウス氏

はい。私もそう思いますが、ローマ字自体も余り気になりません。気になりますかと普通の日本人に聞けば、気にならないと言う人が多いのではないかと思います。だから、どこまで気にするか、政策にするかは、そのこと自体が非常に微妙な問題だと思います。

○成川委員

駅名でいうと、もう一個、例えば「恵比寿」は、ビールになると「Ｙ」で書きますが、あの辺はどんな印象をお持ちでしょうか。

○バックハウス氏

あれはビールだけですよね。ほかに例はないので、その１例だけなら、ブランド名として考えれば、それで特に問題ないと思います。それよりも気になるのが、仮名が間違っているらしいことです。国語の先生に教えていただいたんですが、この仮名は本当は「ウェビス」と読むそうですね。どちらかといえば、その辺を直してほしいです。

○成川委員

お答えくださり、ありがとうございます。

あれは結構ややこしくて、ビールの「ヱビス」が由来で駅名の「恵比寿」になっているし、前に調べたときは、「ア、イ、ウ、エ、オ」ではなくて「ワ、ヰ、ウ、ヱ、ヲ」の「ヱ」を「Ｙ」で書くという慣用が昔はあったという話もあって、複雑だと感じました。

○沖森主査
　では、ほかにございますでしょうか。

○村上委員
　バックハウス先生のお話、非常に面白かったです。
　これからの日本の社会のことを考えると、バックハウス先生のように、外国から日本に移ってくる方はかなり増えてくると思います。ヘボン式は外国人向けとおっしゃっていました。英語圏の人たちはヘボン式が分かると思いますが、それ以外の、英語でない言葉を母語としている人たちからすると、訓令式がいいのか、それともヘボン式がいいのか、その辺りはどうお考えでしょうか。

○バックハウス氏
　とても重要なことですね。「外国人＝英語母語話者／英語のできる人」ということではないというのは、忘れてはいけないことだと思います。ただし、その場合でも、ヘボン式の方がいいと思います。英語圏の人でも、そうでない人でも、どちらも日本語はできない人です。日本語ができたら仮名で読み書きもできるはずです。日本語のことを分からない人という観点から見ると、浅い方がいいです。訓令式は、やはり「ｓ」が/ʃ/という意味もあるのが、どの母語話者から見ても不思議に感じると思います。そのように考えれば、外国人向けには、浅ければ浅いほどいいと思います。

○村上委員
　分かりました。ありがとうございます。

○沖森主査
　では、ほかにございますでしょうか。

○川瀬委員
　とても面白かったです。ありがとうございました。コレクションの写真も含めて堪能させていただきました。
　これはどこの段階でお伺いしようか迷っていたんですが、ローマ字を基に日本語の発音を覚えるということはあるんでしょうか。例えば「女王」、「東京」のような、伸びる音は一般的には、ローマ字書きだと「joou」と並ぶようなローマ字に置き換えると思います。しかし、実際の発音は、「ジョオー」と伸びます。「東京」も「トウキョウ」とおっしゃる外国の方が多いですが、日本人の発音は「トーキョー」です。日本語の中でも唯一、「体育」と、「生命」だけは、「セイメイ」と読んだり「セーメー」と読んだりする場合があります。ローマ字を基にして発音を覚えることがあるかどうか、特に、「新聞」など、「ｍ」と「ｎ」の二通りがあるものは、大きく影響してくると思うのですが、その辺りはいかがでしょうか。

○バックハウス氏
　日本語の学習者に、ローマ字だけを使う人がどのぐらいいるかということでしょうか。そのデータは持っていませんが、少なくとも、長く日本にいる学習者は、漢字は難しいですが、平仮名は読めます。どこかの時点で多分平仮名に行く学習者が多いと思います。完全にローマ字だけというのは―答えにならなくて申し訳ないですが、データがないと何とも言えないので、意外といる可能性もあると思います。

○川瀬委員
　ありがとうございます。

○沖森主査
　それでは、ほかに御質問ございますでしょうか。
（ → 挙手なし。）
　どうもありがとうございました。では、少し時間が押してまいりましたが、ただ今のお話を踏まえての意見交換に入りたいと思います。御自由に御発言いただければと思いますので、何かお考えがあればお願いしたいと思います。

○善本委員
　バックハウス先生、本当にありがとうございました。大変面白く、また、勉強になりました。
　私が今の仕事との関連で一番心に残ったのは、ヘボン式を早い段階で子供に学ばせることが日本語の音韻体系について学ぶきっかけになるという御説明でした。今私が教えている学生は、大部分が小学校の先生になりたいという学生で、彼女たちが非常に悩んでいることがあります。それは、日常生活の中で圧倒的にヘボン式を見掛けるのに、小学校では最初に訓令式を教えるということです。もちろん、訓令式を学ぶことの意味といったことを私も話しているんですが、このことについて、なぜなのかといったことを悩んでいる学生が多いです。確かに日本語の音韻体系を知るという意味で、併用して学んでいくということがあり得るかと感じました。私の子供が五十音を最初に習い始めた頃、大きな声で、「タ、ティ、トゥ、テ、ト」と言ったんです。それで、子音に母音だけ変えたら、本当にそうなるんだと感じました。実際には日本語では「タ、チ、ツ、テ、ト」が同じ行とされているといった、音韻体系を学ぶきっかけになるというお話が非常に印象に残りました。これから先考えていくときに、参考にさせていただければと感じた次第です。本当にありがとうございました。

○バックハウス氏
　ありがとうございました。発表の準備をしながら、最終的にできた段階で、これが一番言いたいことなんだと思いました。これが一番重要だと思います。
　最初に言いましたように、飽くまでも、ローマ字は補助的なものなので、子供たちは日本語の規則性を、仮名表で学ぶものと思います。その後で漢字も学ぶので、例えばヘボン式にすると、日本語の認識が薄まるといった危険性はないと思います。それはどの子もしっかり意識していると思いますので、逆に、音についての意識を高めるのが目的であれば、ヘボン式はかなり力があると思います。

○沖森主査
　ありがとうございました。では、ほかにございますでしょうか。

○福田委員
　ありがとうございました。
　バックハウス先生のお話の最後のまとめのところで、統一させるかどうかというお話があったと思います。例えば標識などを見た場合に、日本語を知っている人は日本語しか見ないし、そうでない人はローマ字しか見ないので、統一させなくても今混乱は起こっていないなというのは感じています。
　一方で、私の配偶者が60代前半なんですが、ファイル名をやり取りする場合に、英語がそんなに得意ではないので、日本語をローマ字にしてファイル名にします。その

ときに、彼は訓令式をかたくなに使うのですが、私の方はどちらかというとヘボン式で入力をしていますので、何が書いてあるのか非常に読みにくいと日常生活で感じています。そうすると、ローマ字で書かれた情報を共有する同士では、統一していた方が、あるいは両方使いこなせるような状態の方がいいかと思いました。

ちなみに、昨日、大学院生のゼミがあって、20代の３人の方に、キーボード入力はどちらですかと聞きました。そうしましたら、訓令式が２人、ヘボン式が１人でした。私自身はヘボン式でやっているので少し驚きました。どうしてヘボン式なのかと聞いたら、英語の教員免許を持っている方で、音に関して自分はすごく敏感に考えていますというようなお話でした。一方、訓令式の方たちは、バックハウス先生が言われたように、簡単だからということでした。

○沖森主査

ありがとうございます。ほかにございますでしょうか。

○森山副主査

バックハウス先生、ありがとうございました。

先ほど教科書の話が少しありましたが、実は私も関わっているもので、少しお話しします。この新大阪の写真などは、不注意でああなっているのではなくて、わざとあの例を出しています。

ローマ字を最初に学習するときには、訓令式が学習しやすいんです。タ行は全部ｔです、サ行は全部ｓですという形でやる方が学習しやすいです。その下に、こういう書き方もありますという形でヘボン式を教えています。一応両方教えるのですが、実際に使われるのはヘボン式の方が多いよねという形で写真は挙げています。そういう点では、時間数が少ないという問題はありますが、両方の学習をしていくという形になっています。

もう一つ、先ほど山手線の話があったときに、「Tokyo」はマクロンを使っていないんですね。「Ōsaki」はマクロンを使っていますよね。そのようにアンバランスになっているのはどうしてなんでしょうか。もう英語的な「Tokyo」の表記が一般化してしまっているということでしょうか。

○バックハウス氏

ありがとうございます。

「Tokyo」は多分、辞書にも出ている言葉なので、それはトランスリタレーション（transliteration、翻字）ではなく、英語の「Tokyo」という言葉そのままにしていて、長音記号がないのだと思います。そういう意味で、多分英語として存在しているということです。これを作ったときに気が付きませんでした。御指摘ありがとうございます。

あと、教科書についても御意見をありがとうございます。資料には載せていないのですが、教科書の次のページで、山手線の渋谷の看板があって、正におっしゃるとおりに、こちらの看板を見て違いを探してみようという非常にいい課題があります。私もそれを見ていいタスクだなと思いました。そういうことですよね。

○森山副主査

はい、そうです。ありがとうございました。

○沖森主査

ありがとうございます。ほかにございますでしょうか。

○成川委員

何度もすみません。

今も日本語学習者でいらっしゃるということでしたが、音の話が出ていたので、「ツ」の話を聞きたいと思います。私の知り合いの日本語が母語ではない学習者に、私は「ツ」がちゃんと言えると言って自慢をする人がいます。ほかの外国語を考えても余り「ツ」という音がなくて、「チュ」になったり「ス」になったりすることが多いかと思いますが、学習する中で「ツ」の発音は難しいのでしょうか。

それから、「tu」を「ツ」と読ませるのは無理があると感じているのですが、その辺の印象も教えていただければと思います。

○バックハウス氏

「ツ」は、特に難しいことはないと思います。どちらかといえば、「ts」の組合せよりも、日本語の独特な母音/ɯ/が、英語の/u/と違いますね。日本語は唇を丸めません。そこで発音に苦労する人が出るのかと思います。ほかには、子音クラスターのない言語では難しいかもしれません。音としては、「ツ」は、例えば英語の「th」のような誰にとっても本当に面倒な音の組合せではないと思います。

このような答えでよろしいでしょうか。

○成川委員

分かりました。結局、母語が何かによって違うと思うので、ドイツ語の方にとってはそんなに難しくないということなのかと思います。私の知り合いはタイ人なんですが、タイ語に「ツ」の音がないので、すごく困るということです。韓国語なども、「トンカツ」が「トンカス」になったりすることがあるということでお聞きしました。

○バックハウス氏

非常に重要な点ですね。母語が何なのか、その音素体系で、苦労するところは全く違ってくるんですね。

○沖森主査

どうもありがとうございました。そろそろ終了の予定時間が参りましたので、誠に申し訳ありませんが、この辺りで、御意見を頂くことを終わりにしたいと思います。

バックハウスさんには、本日御参加いただきまして、誠にありがとうございました。改めて御礼申し上げます。今後の審議においても御助言いただくような場合があるかと思いますが、何とぞよろしくお願いいたします。

本日は有意義な意見交換ができたと感じています。よく整理して、今後の検討に生かしてまいりたいと思います。

最後に、次回お集まりいただくのは来月、11 月 29 日に開催される国語分科会です。そこでは、今期これまでの審議経過をお伝えすることになります。現在、前の期に引き続き、国語分科会で今後取り組むべき課題について検討するとともに、ローマ字のつづり方に関する整理を進めている次第で、具体的には、本日の会議までに、ローマ字のつづり方のほかに、外来語の表記と常用漢字表という内閣告示に関わるところを話題にしていただきました。国語分科会では、これらを整理してお話ししようと思っています。内容については、一旦私に一任していただき、まとめたものを国語分科会の前に時間に余裕を持ってメールなどでお送りし、御覧いただきたいと思っています。委員の皆様方からも御意見を頂き、それらを反映した上で、国語分科会にお示ししたいと考えています。そのような流れでよろしいでしょうか。

（ → 国語課題小委員会、了承。）

ありがとうございました。
では、最後に、事務局から連絡があればお願いします。

○武田主任国語調査官
今後の国語分科会、国語課題小委員会の予定は参考資料４「文化審議会国語分科会及び国語課題小委員会の今後の日程」にまとめてあります。こちらでお確かめください。
また、本日の意見交換をもっと続けたいとお感じになった方もいらっしゃるかと思います。何かおっしゃりたいことがあれば、メールなどで事務局にお寄せいただきましたら、全体で共有したいと思います。せっかくの機会でしたので、ここから更に膨らませられればとも思っています。

○沖森主査
本日もオンラインでの開催ではありましたが、無事に終えることができたことを改めて御礼申し上げたいと思います。
それでは、本日の国語課題小委員会はこれで閉会といたします。お忙しい中、御参加いただきまして、どうもありがとうございました。